

寿老人にお参りをした後、道なりに路地を進むと言問通りに出る。通りをそのまま右へ行く。スカイツリーが真正面に見え、根岸一丁目の交差点を渡ると福祿寿を祀る鬼子母神（真源寺）の赤い幟が目に入る。「列が長くなっているよ」との夏原さんの指摘で交差点を全員が渡り終えるまで見届ける。境内に入ると、すぐ右手に福祿寿を祀る社があり、正面の本堂には大きな提灯が掲げられている。入谷の鬼子母神は江戸三大鬼子母神の一つだが、それ以上に7月の朝顔市が有名だ。川嶋さんによると、朝顔市の間、前の言問通りは全面通行止めとなり、かなりの賑わいを見せるという。また、参拝をしたことがなくても『恐れ入谷の鬼子母神、びっくり下谷の広徳寺、・・・』という江戸っ子の遊び言葉を知っている人は多い。下谷七福神は総じて境内が狭いので、参拝客がほとんどいなくなったここでまず集合写真を撮る。



次に大黒天を祀る英信寺へ向かう。先ほどの根岸一丁目の交差点まで戻り、入谷口通りを北東へ200m進むと右手が英信寺の入口である。40mほどの細い参道を進んで山門をくぐる。本堂の賽銭箱の上には、大きな数珠が下がっていた。滑車が付いていて引っ張ると回せるようになっている。

（右写真）大黒天は本堂左の大黒天堂に安置されている。ここの大黒天は三面大黒天といって正面に大黒天、向かって右に弁財天、左に毘沙門天の顔を持つ非常に珍しい像で、弘法大師作といわれている。小さな像なので、皆さん腰を低くして入れ替わりながら参拝する。

英信寺本堂の向こう側にあるのが毘沙門天を祀る法昌寺。一旦表通りに出て案内板に従って右手の路地をぐるりとまわって数分。毘沙門天のお堂は山門を入った正面にある。他の七福神めぐりのグループと一緒に、狭い境内は参拝客で溢れている。

英信寺の前の道を渡ると、小野照崎神社である。祭神は平安初期の歌人で官吏の小野篁（おのたかむら）。まずは本殿に参拝する。本殿前にはひとりでは抱えられないくらい大きく表情豊かな獅子頭が2つ置かれていた。戦前までは子供達が神輿の代わりにこの獅子頭を担いで神賑（かみにぎわい）をしていたらしい。



鬼子母神にて。左から2番目が新入会の高砂寿一さん、3番目が長谷川公子さん。

本殿左側には高さ約6m、直径約15mの富士塚『下谷坂本富士：天明2（1782）年築造』がある。塚は柵で囲われて門扉は施錠されている。柵の外からでも合目石、修験道の開祖・役小角の像や講碑を見ることができる。往時の姿を残しているとして1979年に国の重要有形民俗文化財に指定された。毎年、例祭であるお山開きは夏越の大祓の6月30日と7月1日に斎行され、この2日間に限り一般に開放される。ご近所に住む川嶋さんは「小さい頃はよく登って遊んだんだよ」とその頃を懐かしんで語ってくれた。

5つ目は弁財天を祀る弁天院。小野照崎神社前の道を左に昭和通りを越えて1本目の路地を左にまがる。しばらく歩くと右手に『朝日辨財天』と書かれた白い幟がはためいていた。社前でお参りするも弁財天がどこに安置されているか分からないといく人かから声上がり、富澤さんが社内にいる方に確認に行き、改めて社奥のかなり上に安置された弁財天に手を合わせたりした。弁財天にお参りをした後、隣接する弁天院公園でベンチやブランコの柵などに座って休憩する。おやつがいくつも配られて小腹を満たした。川嶋さんはここで帰宅されるというので、皆さん代わる代わる挨拶を交わしていた。

弁天院から次の恵比寿神を祀る飛不動尊正宝院へ行く途中、酉の市で有名な鷲（おおとり）神社があるので寄ることにした。朱塗りの門にはたくさんの提灯が掲げられ、門前脇には大きな熊手が立てかけられている。門をくぐるとすぐに朱塗りの明神鳥居がある。拝殿までの参道には『鷲神社』と書かれた幟がたくさんはためいている。途中には茅の輪もあり正月の雰囲気はまだ残っていた。鷲神社は浅草名所七福神の一つでもあり、参拝者が切れずに行き交っていた。

鷲神社にお参りした後、門前の道を北へ100mほど歩き右斜めへの道に入り1本目の路地を左へ進むと飛不動尊に着く。細い参道を進むとこじんまりとした本堂・寺務所があり、その手前左側に恵比寿神を祀る小祠がある。“飛”不動尊とは珍しい名称だが、この寺の住職が本尊の不動尊を背負い大峯山へ修行に出かけた際、本尊のいない江戸の寺に参拝者が集まり祈ったところ、不動尊が一夜にして大峯山から江戸に飛び帰り祈った人びとの願いをかなえてくれたことから名付けられたという。最近では航空関係や海外旅行者の参拝が多らしい。

飛不動尊の前の道を左に5分ほど歩くと布袋尊を祀る寿永寺に着く。途中、いく人かが手前の交差点をなぜか左へまがった。交差点から左を見ると、『田舎まんじゅう』の看板の前に中原さんや中村さんの姿が見える。創業100年のこの店の田舎まんじゅうはおいしく午前中に売り切れてしまうことがあると山内さんが周りの人に伝えたので、買いに行ったようだ。

寿永寺もこじんまりとした寺で、高い塀に囲まれていて、下見の際に閉じられていた扉のみ開いていた。入るとすぐに石段があり、本堂が覆いかぶさるように造られている。本堂右にある寺務所の前に石造りの布袋尊が安置されていて、代わる代わる最後の七福神に参拝をして、無事に下谷七福神めぐりを終えることができた。

寿永寺から解散地点の東京メトロ三ノ輪駅までは数分。予定のある横関さん、中村さん、中原さんと別れて、残りの人たちで中華料理店で懇親会を行なった。

（写真：石塚嘉一他）

行程：JR 鷲谷駅 10:33→10:35 元三島神社（寿老人）10:45→11:00 入谷鬼子母神（福祿寿）11:15→11:20 英信寺（三面大黒天）11:25→11:27 法昌寺（毘沙門天）11:34→11:35 小野照崎神社 11:50→12:05 弁天院（朝日弁財天）12:22→12:34 鷲神社 12:45→12:48 飛不動尊正宝寺（恵比寿神）12:55→13:03 寿永寺 13:11→13:15 東京メトロ三ノ輪駅

大楠山と河津桜鑑賞

荒井 正人

実施日：2月19日（木）

参加者：11名（後掲写真参照）

2年前の3月に三浦半島の武山から三浦富士へと歩き、下山後に三浦海岸駅まで足を伸ばして河津桜を観に行ったのだったが、残念ながら花は終わっていた。桜並木と菜の花の色合いが良くて、どうしてもこれを観たいという思いを捨てきれずにいた。そんなことから今回は、少し研究して時期を早め、桜まつり期間中に設定した。桜の時期という、桜の名所を訪ねるバスツアーもあるが、花は思い通りには咲いてくれない。つぼみツアーだったり、葉桜ツアーになってがっかり、ということもあるようだ。インターネットで桜祭りの会期を一週間早めたと知って、今回も遅かった、ということにならないかとヒヤヒヤしていた。

河津桜は早咲きの桜である。なぜこうも桜を愛でたがるのか。きっと日本人の心には、桜に対する特別な感情があるのだろう。梅が見頃だというのに、桜を観に行くのだ。今では、あちこちで早咲きの河津桜を植えて名所に仕立てている所が増えている。それでも伊豆半島まで行かなくても桜並木と菜の花が見られる点で、三浦海岸は人気がある。

山は大楠山にした。三浦半島の最高峰、といっても標高241m。それでも司馬遼太郎が『街道をゆく』の『三浦半島記』で「山頂からの眺望は、日本国のどの名山よりもすぐれている」と記しているように、富士山をはじめ360度の展望が売りである。「かながわ景観50選」の一つにも選ばれている。登山道は東西からいくつかあるが、半島西側の登山口から登り、東へ下ってバスで衣笠に出て、電車を乗り継いで三浦海岸駅に行く計画とした。

山歩きとしてはずいぶん遅い時間からのスタートで、10時過ぎにJR逗子駅に集合。バスで半島の西側を南下していく。葉山御用邸の前を左折して海が目に入れば、相模湾越しの富士山もお出ましである。山に入ると展望が無いので、車窓の景色を楽しんでいく。前田橋というバス停で下車し、少し先の前田川遊歩道に下りる。ざっと直径50センチ前後の石が飛び石橋になっていて、これを

渡っていくところが何ヶ所もある。流れのすぐ脇を歩くところなどもあって、久々の山歩きでバランスが悪く何回かヒヤッとした。遊歩道から登山口に上がり、ウエアを一枚脱いで、いよいよ登りとなる。偽木の階段が続く。前々日におしめりがあったので、照葉樹林帯で陽もささない山路では滑る所もあるのではないかと考えていたが、そんな



心配もなく、時折リスを見たりして行く。途中一本立てて、平坦な道を進むと、えぐれた道の下りになって、せっかく登ったのにとの思いになる。それでもお腹が減ったという声も聞こえる頃に、山頂手前の大楠平に着く。桜も咲いている。ここには国土交通省のレーダー雨量観測所があり、灯台のような白いレーダー塔が高々と聳えている。3階建てに相当する展望台がある。山頂には展望塔があるのだが、老朽化で今は立ち入り禁止になっていることもあり、皆で登って富士山をはじめ

とする山々を眺める。伊豆大島が間近に見える。藤本一美氏の『展望の山 50 選関東編』から大楠山の部分をコピーしていったので、皆さんに配る。最後のひと踏ん張りで山頂に着けば、そこにも何本か河津桜があり、それを眺めながらめいめい持参の昼ごはんにする。暖かい日になって良かったと思う。

気づけば何と、自転車を押してハアハア息を弾ませて二人組が到着した。その彼にシャッターを押してもらって集合写真を撮り、下山路に入るとすぐに急な階段が続く。左側はゴルフ場なので、何やら声が聞こえる。打球が当たらないように設けられたネットの中の下り道は、ほとんどゴルフ場内を歩いているようなものだ。登り返しになって下を向いて進んでいたら分岐を見落とし、後続組から指摘された。立入禁止のゴルフ場の扉まで行ってしまふところだった。

水道施設を回り込むと民家ができて、間もなく横浜横須賀道路を渡る橋に出る。そのまま行けば阿部倉温泉だ。橋から高速で走る車を下に見て渡り終わったところで小休止。集落の中は分岐が多くてわかりづらいが、コンクリート道を 10 分も歩けば、大楠山登山口というバス停で、まずは無事に下山してホッとする。

JR と京急を乗り継いで三浦海岸駅に到着すれば、駅前の 3 本の河津桜が満開で、その下のベン



チに憩う人が沢山！ さすがに桜祭である。名物のマグロを売る店など、テントも沢山出ている。海水浴シーズンはともかく、一年で最も人出の多いかき入れ時なのだろう。

人ごみを抜けて桜並木へと向かう。このゆるゆるとした坂道が下山後には結構堪える。並木の始まり地点では、ボランティアの方が交通整理をしている。それでもさすがに午後の 3 時半を過ぎて賑わいはピークを過ぎたようで、行き交う人の方が多い。皆、桜のピンクと菜の花の黄色をカメラに収めていく。



後列左から 栗城幸二、高砂寿一、小部正治、小林敏博
荒井正人、横関邦子、石塚嘉一
前列左から 河野悠二、鳥橋祥子、川口章子、辻橋明子

すぐ脇は京急の線路で、ここを通る電車の写真は京急のポスターやカレンダーに採用されているほどである。枝にはメジロばかりでなくリスもいてびっくりした。小松ヶ池の入口で、池を半周する組と、往路を戻り反省会の店に先行する組とに分かれた。美味しいマグロもいただいて帰る頃にはライトアップされた夜桜まで味わえた。



(写真：高砂寿一、荒井正人)

ある博物学研究者一家

南川 金一

山岳会史には多様な会員が登場する。山岳会が続いてきたのは、山や会への思いに共鳴して入会した会員が絶えなかったからである。山岳会史を彩ったそれらの人々の山への思い、山岳会への思いはどのようなものだったのか——それを探るべく追いつけてきた。

山岳会の最初の会員名簿である明治40年の名簿に、東京市本郷区金助町72の住所で田中五一と田中健太郎という名前が並んで載っている。住所が同じで姓が同じとあれば兄弟か一族であろうと思われるが、その関係はおろか、どういう経緯で山岳会に入会したのか、この二人に関しての情報は何も得られなかった。

最近になって、「木下尚江の弟子—田中五一と吉田三郎—」と題するレポートが見付かった。執筆者の山際圭司を検索すると白百合女子大教授、近代文学研究者で木下尚江の研究者であり、著作に『木下尚江—先覚者の闘いと悩み—』（理論社、1955）他がある。

そのレポートによると、田中五一はかつて東京府立九中の教員であり、山際圭司はその時の教え子だったのだが、それは当初は互いに知らないことだった。田中五一は『週刊朝日』に載った『木下尚江—先覚者の闘いと悩み—』の書評を読んで、著者の山際圭司に手紙を書き、山際の木下尚江観への感想を書いてきたのが発端だった。何回かの手紙のやりとりの経緯が「木下尚江の弟子」に綴られていて、それによって田中五一の経歴と生涯が明らかになった。

田中五一は博物学者田中芳男の次男として1889（明治22）年生まれ。1919（大正8）年北大農学部を卒業して府立二中・五中・九中の教師として博物を教えた。1913（大正2）、24歳の時、肺を患い、大正8年にも流行性感冒で生死の境をさまよう経験からたどり着いたのが「静坐法」だった。木下尚江といえば、日露戦争に非戦論を唱えた社会主義者として知られる。田中五一が木下尚江に傾倒したのは、その思想ではなく、木下の「静坐法」と称する瞑想法だった。若くして結核を病み、健康でないことに悩む身であったとあれば、その心情は理解できる。

明治38年、田中五一は健太郎とともに博物学同志会に入会し、武田久吉方で4月9日に開かれた第5回総会に二人で出席した。その後も同志会の行事に熱心に参加していたので、翌年山岳会への入会を勧められたのであろう。誘ったのは武田久吉と思われる。

田中五一の父親の田中芳男（1838～1919）は明治期の博物学者・動物学者・植物学者・農学者である。1867（慶應3）年のパリ万国博には、自ら関東一円で昆虫を採集、標本を作製して持参して出品した。1875（明治8）年には上野公園の設計、博物館と動物園の開設に携わった。明治初めには米国から苗木を取り寄せて培養した2万本のリンゴの苗木を東北、長野に配布してわが国のリンゴ栽培の先駆けとなったという農学者であり、園芸学者でもあった。後に貴族院議員になった。

爵位を受けて男爵家となったことから、田中家は『人事興信録』に載るようになり、それによって一族の系譜が浮かび上がった。田中芳男家は長女・なつの上に生まれた長男が早逝、その後に女子が三人続き、その後に生まれたのが次男の五一だった。芳男は天保9年生まれであり、早く後継ぎを決めておきたいと考えたのであろう、長女・なつ（1871～1930）の夫・節三郎（1865～1903）を養嗣子とした。したがって、田中芳男家には五一の居場所は無くなった。節三郎の長男が健太郎（1889～1915）である。つまり、五一と健太郎は叔父と甥の関係で、同年齢だった。節三郎は東京帝大農科大学研究科を卒業、助教授だったが36歳で死去した。健太郎は大正2年農科大学農学科を卒業したが、26歳で夭折している。

